



北海道枝幸町の澤田礼二さん(55)は乳牛の快適性を重視し、健康に長く搾乳できる牛群づくりを追究している。牛群改良中で現在10歳以上で10産の牛は1頭だが、毛づやも良く一線の現役。将来も安定的な長命連産を可能にするため、4年ほど前から進めている牛舎の改築は乳量増へ着実に成果を挙げている。

環境改善はストレス軽減
 澤田牧場の飼養頭数は160頭、うち経産牛は96頭。草地は160畝で、粗飼料の十分な確保に努める。規模拡大で初産牛を増やしているため1頭当たりの年平均乳量は現在1万kgの前半にとどまる。だが大規模な初産牛増頭にもかかわらず1万kgを維持しているのは、長年地域の目標であり続ける確かな牛づくりの技術に加え、牛のストレスを減らす牛舎の改善に取り組んでいるから。

つなぎ飼いの牛舎は牛の首を柵に挟んでいたのを、首輪でつなぐ方式に変え自由度を高めた。さらに換気は送風機で一定方向に流す方式に。給水管は口径がそれまでの2倍の50mmに改めるなど、体維持や食込み量の増加などにつながっている。

**めざす
 10歳、10産、10万***

今後、経産牛を110頭まで増やし、年間目標生産量は1000t。年間乳量1万2000kg程度と見込める牛は多く、後継者の和人さん(30)も1000t規模を近い将来無理なく達成できるのではと手こたえを感じている。

家族で協力し合い、「10歳以上、10産以上で生涯乳量10万kg」に挑戦している。

こうした改善は関係機関の協力を得ながら材料調達し、自らの労力を活用して施工。ほとんどが乳製品に加工される原料乳地帯の北海道の酪農家は、近年の不安な消費動向に薄水を踏む思いだ。このため澤田さんは生産者の手取りを補う「加工原料乳生産者補給金制度」の必要性を指摘。「補給金があるから一定の収入が見込め、経営が安定する。規模拡大にもつながった」と話す。

経営安定に必要な補給金制度

特に乳量が落ち込む夏場に環境改善の効果があるという。日常のストレスが少ないためか、牛は外部の人への警戒心も少ない様子だ。

快適性、健康を重視し
 長く搾乳できる
 牛群づくり

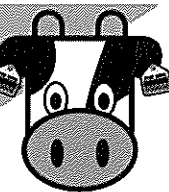
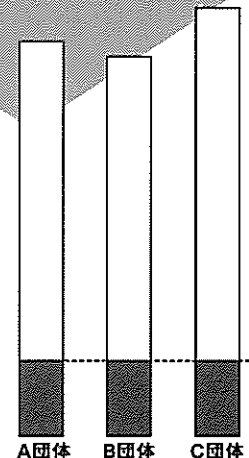
北海道枝幸町 澤田礼二さん

加工原料乳生産者補給金制度について

法律に基づき、独立行政法人農畜産業振興機構が実施する「加工原料乳生産者補給金制度」は、飲用牛乳向けに比べて価格が安い、バターや脱脂粉乳などの原料となる加工原料乳を生産する酪農家に対して、生産者補給金を支払うもので、酪農経営の安定と牛乳・乳製品の安定供給を目的としています。

生産者補給金の単価は、毎年度、農林水産大臣が加工原料乳の生産地域における生乳の再生産を確保できるよう、その水準に決定します。

また、機構では、加工原料乳の価格が低落した場合に、その一部を補てんする「加工原料乳生産者経営安定対策」も、補給金制度と一体的に実施しています。



販売価格
 当事者間で個別交渉により決定

生産者補給金
 毎年度、農林水産大臣が決定
 2008年度
 単価:11.85円/kg
 限度数量:195万トン

お問い合わせ先

酪農乳業部酪農経営課 Tel.03-3583-2706

詳しくは、当機構のホームページをご覧ください。

ホームページ <http://www.alic.go.jp>

独立行政法人 農畜産業振興機構 **alic**